郷土資料編　昭和四十七年四月廿三日

第四十七回史跡めぐり

平方地区
林西寺と春龍上人

越谷市郷土研究会

第四十七回史跡めぐり御案内

一、日時　昭和四十七年四月廿三日
午前十時　越谷駅構内集合

二、場所　平方村　林西寺
開山　吾雄上人　その他

三、コース　越谷駅午前十時　発
→武里駅下車
→林西寺　見学
→越谷駅

四、会費　二〇〇円　交通費　その他

五、昼食　各自持参のこと

備考　第十三回（昭和四十二年四月廿三日）に訪ねたることあり。

目次

一、平方村とは……新編武蔵風土記稿……二頁
平林寺と中興開山吾雄上人
二、碑堂……〃
宗源寺……〃
西楽寺……〃
戸恩院……〃
西光院……〃
西光寺……〃
二、林西寺……史蹟と伝説より……三頁
吾雄上人事蹟……四頁
林西寺由緒……四頁

註　①
②

三、メモ　七頁

平方村とは

新編武蔵風土記稿によれば次のように記されている。

平方村は江戸より行程八里、民家百八十五戸、南は船渡・大泊の二村にて、西は大枝、大畑・備後の村々に接し、東北は吉利根川を限り、川の向は遠飾郡鉄子村、赤沼、藤塚の三村なり。

東西二十町、南北十町許、御入国以来御料所なり。用水及び検地の年代は前村に異らず。

註　前村とは大枝村、大泊村、藤塚、大里村、下間久里、上間久里、大里、大林村をさしている。

1. 新田の検地、　元禄改め寛延三年改めたり。

2. 本田の分は　前村に同じ。即ち弥十郎村、大杉村、大松村、川崎、向畑村をさしている。

3. 向畑村の検地　徐村添新田は明和七年遠藤兵右衛門の検地あり。

4. 大寺村、塙林村、中島村をさす。それで中島村は、享保十六年に東村藤右衛門、伊藤市兵衛　寛延三年に[illegible]植田八太夫、若松西右衛門、延享三年船橋安右衛門　寛暦五年に小野左太夫、明和七年に遠藤兵右衛門等検地をなしたり。通じて五〇六回行われたことになる。

新編武蔵風土記稿巻十・百八十四頁上段から。

○　高札場　北の方に在り。

小名　横手、南、東、沖の前、砂間、戸崎、山谷

○　吉利根川　東北を流る。川幅百間許、此川うちに村民、私に渡せる船渡二ケ所あり。

一は遠飾郡藤塚村に通じ一は向郡赤沼村に通ず。

香取社

村の鎮守、西光寺の持、下二社持同じ。　末社　稲荷神社二社

○　稲荷社　○　女體社　○　香取社　西郷寺持

○　三島社　耳聞寺持下同じ　○　鹿島社

○　浅間社　東源寺持　○　弁天社　村民の持

◎　林西寺

浄土宗、京都智恵院末、白雲山月蓮院と号す。本尊阿弥陀、恵心の作開山等海法阿、示寂の年代を伝えず。[illegible]九世然誉春龍大阿法信と号す。武州岩槻の人、初め列の西方林西寺の僧弁に授て剃髪、弁正氏にて其寺に住し、増上寺観智国師に嗣事し、後滝山大善寺に移り、又上野国新田大光院に住し、元和九年八月九日入滅、俗姓は藤原氏、武州岩槻の人、初は曼羅と号せしを、後神君の上意を蒙り、春龍と改めしと云う。又何時

の頃にや、神君の御帰依の時、吾龍拔群なれば御感賞として学問の料五十石を給はれり。

この時より、藤田流を改めて浅流となせり。即ち今の如く浅田流の末となる由、後天正十九年廿五石の御朱印を賜はれりと。尚吾龍のことは市の剣の民、井上氏の系図に見るべし。

今も御朱印は廿五石なれば、彼学問料は吾龍のみへ賜はれしなるべし

○ 鐘楼　近年新造の趣なり

二尊堂　地蔵観音を安ず。

○ 崇源寺　林西寺の末。下二ヶ寺も同じ末なり。明星山と号す。本尊阿弥陀、中興開山円誉

慶波。元和二年三月示寂す。

○ 月照院　沖新山と号す。当寺は本寺吾龍・院模の文禄元年建立せしと云う。因て院号本寺と同じ

○ 西楽寺　聖徳山と号す。開山慶誉示寂の年月を失ふ。中興を誉春三貞と称す。

万治二年三月示寂す。

○ 西光院　新義真言宗、花ヶ崎村瑞雲寺末。如体山と号す。本尊阿弥陀。

○ 西光寺　同宗、当郡赤沼村浄楽寺末。稲荷山と号す。本尊薬師を安ず。

○○○○○ ☆ ○○○○

林西寺

越谷市の史跡と伝説

※ 十三頁下段～十五頁下段参照

山城国愛宕郡東山知恩院末、浄土宗・林西寺は古く大善寺と号し、或阿等海和尚を開祖とした。創建は不詳である。本寺は浄土宗四流六派の宿一であり、藤田村阿の嶋流とされている。然し、第九世吾龍和尚住職の命を畏じてから徳川家康の帰依深く特に知恩院末に命じて自後は本流白旗に転じた。

其後殿上においても、法戒有った時、和尚もその列にあって被斉の法味を翰じたのを賞し、学問料として廿五十石を賜わり、以後歴々当寺に参詣されたと云われ、その後一束の檀林として五貫文を改め、天正十九年廿五石の朱印とし、之に加え境内千坪を増加し、不入の地と定め、号を林西寺と改めたと称されている。

元禄年間当寺が廃絶したのを第十四世住職が再興

したものといわれ、明治十五年十一月末同地上地となった。

a. 本尊　阿弥陀如来
b 本堂　間口　拾間　奥行七間三尺
c 庫裡　間口　三間　奥行六間三尺
d 書院　間口　四間　奥行四間三尺
e 境内　千百八拾貳坪
f 境内仏堂
　　春日
　　閻魔堂　間口貳間　奥行貳間
　　遠江武州葛飾郡新川村農　白石勝右衛門墓所の小堂寄附と言う。
g 由緒
　　阿弥陀如来及び西殿侍立像
　　本堂に安置される本尊で三体の立像である。特別の変化はなく、江戸中期頃の作と拝せられる。
　　阿弥陀如来は総高、約五尺（蓮台約二尺）観音、勢至の二菩薩は約三尺である。
　　当寺はしばしば火災に見舞われ、当寺に関する資料も絶無状態とされている。また吾龍上人が太田大光院へ転じた際、資料等も持参したとも聞く。

開山吾龍上人略伝

当寺開山、諱は吾龍宮は然誉源蓮社と号す。俗姓は源氏、源氏は井上武蔵国府王兎一の郷村の人なり其の父を井上将監信貞と云う。郷太田道灌の家臣なり、主家滅亡の後一の郷村に隠かの采地あるを以て此處に帰農し、二君に仕えずして永く閑隠居の風を慕う。

一日、其妻「近寄し龍神の社に詣ず。而して其夜一定の黒雲周囲より入るを夢む。然してより自から身の重きを覚ゆ。夫信貞之を悦べり。

天文十一壬寅年八月廿五日、難なく男子を産む。是即ち上人なり。二～三歳の頃より人の念仏を聞ては則完璧として笑を含み、亦姿態自ら念仏し給う。天資聡明にして見識群童に似ず。動静殆んど大人の如し、宿因の然らしむる所か。常に龍神の社に遊び小石を以って仏像に擬し、土を以って伏拝具として楽しみ玉う。宛も宗祖大師の兒童たりし時の如くで

十三歳の春、忽然として出家の志を起し、切に社俗の形ちをきらい給う。一夜霊夢を感じ、之を父母に語る。

父母これを聞きて大に歓喜し、即其出家を許して

隠村・平方村大善寺岌帝和間の室に授ず。時に、上人十四才、弘治元年乙卯の春なり。此処に於て始めて佛家の業を受く。而一知十の才。時人舌を巻き義を崇し嶽を出す。吉徳に恥じず。

是歳秋、再度して法名を春龍と称す。該師後以前、此沙弥　非凡の法器、希有の良材なり。衆を以てほだすべき者に非ず。早く良師に値遇せしむるに如かず。と。

十五歳の夏より、東京菱潟上寺観智国師の許に掛錫せしむ。国師深く其の俊才を美し、教諭他に異なり、是に依って学業の進歩嶽を比ぶる者なし。

螢雪積雪、年を重ねて倦まず。斯行益々高く道心転々深し、自証の樹者を雲菩上人に化し他の秘嶽を尽菩上人に伝え給う。かって東照神君菱上寺の論義の席に臨し給い上人の精義妙弁絶倫なるに驚き、それを称歎し給えり。而してより以来、帰依殊に厚く、若干の栗を寄いて修学の費に充てしめ、祖先の造寺の為に当山を造営し寺号を林西寺と改め上人をして開山たらしむ。

衆徒嶽の如く集って嶽を受け、遠近風を望で化をこおむる。後水神君の命に依り龍山大善寺に移り、新田大光院へ転ず、何れも開山と称せらる。元和九年癸亥八月九日、忽然として示寂し給う。寿令八拾二歳

嗚呼、上人在世の化益々実に計り難し、或時は悪業を度して鬼を哭かしめ、或る時は罪人を慰して自ら苦に代り給う。

当時の人、上人を以って写して生身の菩薩と為し、後人民の祈願を満足せしめ給うこと愈々著し。之に依って信敬する者、年を経て益々多し。夫れ、山高ければ見る事遠く、源深ければ流れ広し、上人行徳の高き、慈恩の深き、仰いで称すべき、敬して敬すべし。

これは版木にて刷り上げられているので、当時相当数、刷られ信者、若しくは当寺に関係ある人々に配布されたものだと思われるが、この写伝は、他にないので当寺を知る貴重な小冊子である。

註　春龍（二二二六～二二八六）日本紀元西暦一二五五六～一二八六年に当る。

関東十八檀林の一たる新田大光院開山、寺は胡倍源蓮社然誉大阿と号す。武蔵崎玉の人、初め川の林西寺岌弁に師事し、後菱の潟上寺源誉存応の門に修学し宗派を崇く。

後林西寺に帰住すること十有七年、その間

に応じて各地を教化して相模に来迎寺、武蔵に長福寺を開き、幕命により武蔵瀧山大善寺に籠ず。慶長十八年、徳川家康下野新田に大光院を創するや、請ぜられて開山第一世となる。

註 ○○○○○

吞龍上人在世期間に就いて疑点の残す所甚。

一、浄土宗辞典の六十八才説

二、武蔵風土記稿の八十余歳 } 其差14才

この差の生じた所は一体何が原因だろうか。案ずるに前者は公門得度を起点として在世でなく在俗期間を以ってした点が考えられる。得度したのが、弘治元年乙卯の春にして十四才で平方村大善寺岌弟和尚について堂に入る歳で、生誕は天文十一年（一五四二年だから今から約四三〇年前に当る。

示寂の年は、元和九年癸亥八月（西暦一六二三年であるから三四九年前に当り、今年は三五〇回忌の年ともなろう。

以上の年代照合によって、在世と在俗の相違と観ればこの疑点は解消出来よう。

註 三原

開の徳化頗る盛んにして、道俗の信仰甚だ多し元和九年八月九日寂 寿六十八才（一説には、八十余歳）大光院本堂の西の方に廟を建て葬る爾に子孫吞龍と称し今日に至る迄信仰厚るさかんなり。

（浄土宗辞典 昭和十八年大東出版）

問題 要精査

崇源寺と中興開山円誉岌波とは？

新井源崇（本名新井角左衛門）大坂冬之陣にて戦死元和二年三月示寂と一致する所に？が残る。新井家（上州新井に住し足利一色家系譜に見る）奥家―奥時―源貞―源崇（角左衛門）―源次（右馬介）（川崎浪近氏の祖）で主家頼忠の家臣であり又天正十八年に土着した同族政義（治林寺殿転翁正喩）も同年同月の寂であるが、それ等と関係なきや仮に関係ありとすれば、文化財下関久里の獅子舞と直結する事柄ともなるが……　此後の鍵となるかも知れない。弟源次（右馬介は源農指として該地区に子孫源右衛門新田、源前の地名を残している。下関久里源前、上関久里源右衛門新田（南窪田）が散見する。近い降後地に墓所も調査対象になるであろう。当該地区への課題として提起したい。